

論文番号 26

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

Spontaneous intracerebral hemorrhage [Review]

非外傷性脳内出血 (総説)

執筆者

Qureshi AI. Tuhim S. Broderick JP. Batjer HH. Hondo H. Hanley DF

掲載誌 (番号又は発行年月日)

New England Journal of Medicine. 344(19):1450-60, 2001 May 10.

キーワード

脳内出血・アルコール摂取・高血圧

要旨

非外傷性脳内出血は脳実質での出血であり、脳室やまれにくも膜下腔に拡がることもある。米国では年間 37,000～52,400 人の発症があり、世界的には 100,000 人あたり 10～20 例の発症が報告されている。高齢化が進展するに伴って脳内出血の発症は増加することが予想される。脳卒中全体の 10～15%を占めており、死亡率は非常に高く、1 年生存率はわずか 38%である。出血の原因によって、本態性と二次性の 2 つに分けることができる。本態性脳内出血は全体の 78～88%を占めており、慢性高血圧やアミロイド性血管障害などによる微小血管の破裂によって起こる。危険因子としては第一に高血圧が挙げられる。また、アルコール多量摂取によっても危険度が高まる。二次性脳内出血の頻度は本態性よりは少なく、動静脈奇形や動脈瘤などの血管の異常、腫瘍、血液の凝固障害などによって起こる。頻度としては高血圧性脳内出血が多いのだが、二次性脳内出血は再発の可能性も高く、治療が可能なため、血管の異常の検索が必須である。

この記事はオリジナルの研究報告ではなく、脳内出血の疫学・病態生理・臨床的特徴・治療・予後などについてまとめた総説であるが、非常に有名な雑誌に掲載されているものであり、出版から一年以内に既に引用が 100 件を越えており、当分の間、非外傷性脳内出血について論じる際の標準的な知見となるものと考えられる。